

事業名	平成 23 年度能登キャンパス共同調査研究事業 「能登の地域資源を活かした 6 次産業化の可能性について」	
実施主体	金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター 佐無田光准教授、安嶋是晴助教	
活動形態	活動場所	輪島市、珠洲市、穴水町、能登町
	活動人数	輪島市、珠洲市、穴水町、能登町の職員 8 名、金沢大学地域政策研究センター 教員 2 名 計 10 名
	期間	平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
活動内容	<p><背景></p> <p>雇用流出が著しい能登地域において、その状況から脱却するには地域自らが「稼げる」産業を興すことが必要不可欠となる。そこで、各自治体と協力しながら地域資源の本質的な価値を見直し、地域の特色を生かした 6 次産業での雇用創出策の可能性を探る。</p> <p><課題></p> <p>地域資源の発掘と商品化、販路拡大の戦略方法を検討し、6 次産業における地方の雇用創出策を見出す。ただし、商品開発が目的ではなく、生産から流通までを能登地域で担うためにはどのような条件が必要なのかを明らかにする。</p> <p><活動概要></p> <p>自治体関係者と研究者が参加し、平成 23 年 4 月と 5 月に課題やテーマ設定などをすり合わせるワークショップを開催。続いて、同年 8 月、11 月、翌年 2 月に共同研究会を開いた。共同研究会では、90 年代に入って能登の特色である漆器や繊維産業が衰退し、それに伴って農家人口が低下した背景や、東北との比較から能登は生産から消費を地域内で行う傾向が強い現状などが報告された。6 次産業化については、特産品の商品化に留まらず、文化的な付加価値を加えて固定ファンを確保することなどが提案された。また、農業や地域医療、観光、伝統工芸など、さまざまな産業が連携し、兼業や副業を推進することで、能登広域にわたって就労機会を確保できる可能性も示唆された。</p> <p>平成 24 年 2 月には、高齢者が里山の葉や花を採取し、料亭などに出荷する「葉っぱビジネス」で成功を収める徳島県上勝町を視察。高齢化、過疎化が進む中でも地域資源を活かし、生活収入源と住民の生きがいを生み出す取り組みに理解を深めた。</p> <p><活動成果></p> <p>各自治体関係者と研究者の間で繰り広げられた討論において、研究者側からは、規模は小さくても特色ある産物を生み出すこと、複数の地域が相互につながり、加工・流通のネットワークを構築する意見などが上がった。各自治体からは、食を切り口にしたブランド化の振興（珠洲市）、観光と結びつけた牡蠣の生産戦略（穴水町）などの提案が寄せられるなど、能登における 6 次産業化への一つの道筋を示した。</p>	